

## シリーズ・いま、世界の子どもの本は？

### 第 2 回

#### いま、イギリスの子どもの本は？ (要旨)

平成 22 年 9 月 25 日

講師：ジャクリーン・ウィルソン

(1) 私は、物心ついてからずっと作家になりたいと思っていました。本が大好きだったからです。文字がまだ読めないうちから、私は自分が大事にしていた絵本3冊を、どこへ行くにも持ち歩いていました。その3冊とは、イーニッド・ブライトンの『ノディ』と、ビアトリクス・ポターの『ティギーおばさんのおはなし』と、空を飛ぶ白ウサギを主人公にした『プーキー』という大型絵本です。私は絵をながめでは、小さい主人公たちについてのお話を自分で作りあげていたものです。ちょっと買い物に出るにもこの3冊を持ち歩くので、母は迷惑がっていました。でも、私が本を抱えて隅っこのほうに腰をおろし時には指で文字を追うようにしながら何やらつぶやいている光景は、おもしろいと思っていたようです。文字はひとつも読めないのに、まるですらすらと本を読んでいるように見えたのですから。その様子を目にした人たちは、3歳か4歳のこの小さな女の子は神童かと驚嘆したものです。

(2) 私は毎週土曜日におこづかいをもらうと、よく雑貨店のウルワースに行って、つやつやの赤い表紙のノートを買いました。子ども時代に私がそのノートに書いたお話は、何百篇にもものぼります。たいていは家で書いていましたが、学校で書くこともありました。時には、書いたお話をみんなの前で読んでくれと頼まれることもありました。それで気をよくしたのかもしれませんが、9歳のときに私は小説を書こうと思い立ちました。先生が、学校用のちゃんとしたノートを下さったのですが、その表紙には、まず主な登場人物の絵を描きました。私が書きたかったのは、家族の物語でした。自分の家族は母と父と私だけの小さな家族でしたが、私は大家族の物語を読むのが大好きでした。『若草物語』や『ケティ物語』のような19世紀の古典的少女小説が好きだったのです。日本の子どもたちが今でもこうした物語を読んでいるかどうかは知りませんが、悲しいことにイギリスの子どもたちはもう読まなくなってしまいました。時間もないし好みも違ってしまったからです。とにかく私は大家族をめぐる小説を書こう

と決めていました。それも貧しい家族にしたいと思っていました。その頃の子どもの本に出てくるのはたいがい中流家庭で、緑豊かな庭のある、田舎の大きな家に住んでいました。でも私の頭にあったのは、都会に暮らし、さまざまな問題を抱えた労働者階級の家族でした。登場人物の中には、ボーイフレンドと夜のデートを楽しみたいティーンエイジャーのかわいい女の子もいれば、まじめで勉強熱心で読書好きの妹もいれば、お下げ髪にリボンを結び女優になることを夢見る目立ちたがり屋の子もいれば、いたずらな双子もいれば、いじめられっ子でひ弱な男の子もいれば、何でも思い通りにしてしまういばりんぼの妹もいました。この時書いたお話は、今でもまだ戸棚のどこかに入っているはずですが、もちろん大傑作とは言えないし、20ページもないので小説とは呼べないかもしれません。でも登場人物たちはなかなかおもしろかったと、私は今でも思っています。それから50年以上たった今でも、私は同じような子どもたちについて書いているのですからね！

(3) 小学校の先生たちはみんな親切で、私が将来は作家になりたいとそっと打ち明けても、笑ったりしませんでした。ところが11歳で中学に入ると、ようすが違ってきました。国語は、ピアス先生というとても優秀な先生の担当でした。ピアス先生は、図書館にあるおもしろい本をいろいろと推薦してくれましたし、私は先生の言葉を一言も聞き漏らすまいと耳をそばだてていました。国語の時間には、週に一度作文を書くことになっていて、私はピアス先生にほめてもらおうと必死にがんばりました。提出した作文が戻ってくる時は、いつも心臓がドキドキしたものです。ところが、私がどんなにほめてほしくても、作文にはたいがい悪い点がついていて、そこら中に先生の赤ペンが入っていたのです。ピアス先生のコメントは、「俗語です！」「あまりにも口語的！」「雰囲気が好きになれません！」「きわめて不適切！」などという痛烈なものでした。

(4) さあ、困りました。私はがっかりし、ピアス先生がひどいと思うなら、自分は作家になれっこないと思うようになりました。もしピアス先生がまだご存命で、私の最新作をお見せしたら、どうなるでしょう？先生は今でも首を横にふって赤ペンを取り上げ、同じようなコメントをどのページにも書かれるのでしょうか？

(5) ピアス先生は、作家になれと励ますようなことは、もちろん一度もなさいませんでした。私の両親

も、娘はばかばかしい野心を抱いていると考えていました。私の家系には、文章を書くのを仕事にするような者は一人もいなかったのです。私の家系は労働者階級で、みんな早くに学校を終え、運が良ければ職業訓練を受けて、一生コツコツと働くような人たちばかりでした。従って母も私に16歳で学校を終えるように言い、秘書になるための専門学校へ1年間通わせたのです。私は、秘書になりたくはなかったのですが、1960年代には、親の言うことを聞くのが当たり前とされていました。特に私のように、手ごわい母親がいる場合にはね。

(6) 私は、気が進まないまま速記やタイプを学び、1年経つとロンドンで下っ端の秘書の仕事を探すことになりました。ロンドンの夕刊の求人欄を沈んだ気持ちでながめていたときです。一つの広告が目飛び込んできました。「ティーンエイジャーの作家を求む」という広告です。私はティーンエイジャーだし、どうしても作家になりたいと思っていました。

(7) すぐに問い合わせの手紙を書くと、スコットランドのDCトムソンという出版社から資料が送られてきました。そこは(今でもそうですが)スコットランドの新聞や、女性誌や、「ビーノ」や「ダンディ」といった子ども向けマンガ週刊誌を出している大きな出版社でした。60年代の若者の新しい波に気づいた彼らは、フルカラーでティーンエイジャーの雑誌を出す時期が到来したと考え、半年かけて新雑誌創刊の準備をしていました。送られてきた資料を見ると、ロマンチックな短編を求めているようです。

(8) 短編なら、私は子ども時代からずっと書いてきましたが、ロマンチックに書こうと思ったことはありませんでした。それは、私にユーモアのセンスがありすぎるせいかもしれません。女の子が男の子の瞳を見つめてすてきだわと思うような、甘ったるい感傷的な話を、まじめな顔で書くことが私にはできないのです。恋愛物語は一度だけ書いたことがありますが、気に入らなくて破り捨ててしまいました。

(9) そこで私は、DCトムソン社がほしがっていたものを送るかわりに、大胆な行動に出ました。自分なら新雑誌でこんなものが読みたい、と思う物語を書いて送ることにしたのです。それは私の実体験に基づく物語で、主人公は初めてダンスパーティに出かける女の子でした。最初は友だちとおしゃべりし

たり、メイクや新しいヘアスタイルやハイヒールを試したりしてワクワクしています。でも、ほかの女の子たちはみんな男の子とダンスを始めるのに、その子だけはパートナーなしで取り残されます。ボーイフレンドがいないかわいそうな自分をみんなが見ているような気がします。そこで、その子は音楽に合わせてつま先で調子を取ったり、トイレにしょっちゅう行ってみたり、果敢に微笑んだりして、自分も楽しんでいるふりをします。

やがてだれかの父親が女の子たちを迎えにやってきます。家で待っていた主人公の母親は、娘のダンスパーティでの様子を聞きたがります。主人公の女の子は、「自分と踊りたい男の子がたくさんいたからずっと踊っていた。ほんとうにすばらしい夜だった」と嘘をつきます。それから自分の寝室に駆け込んで、枕をかぶって泣くのです。悲しい物語ですが、私は自分を茶化したおもしろおかしい話に仕立てました。

(10) 物語の出来に自信はないし、出版社のほしがっているロマンチックな短編でもありません。でも私はスコットランドの出版社にこれを送ることにしました。きっと返事もくれないだろうと思っていたので、数日後に新雑誌の編集者からきちんとタイプした手紙が届いた時はびっくりしました。手紙には、私の作品が気に入ったので、3ポンドの原稿料を払うと書いてありました。日本円に換算していくらになるのかわかりませんが、たいした金額ではありません。1960年代でさえたいした金額ではありませんでした。でも、私にとっては金額以上の大きい意味をもっていました。この私をDCトムソン社が作家として認めてくれたということなのですから。私が17歳になったばかりで経験がないことも、問題にはされませんでした。彼らは、私を一人前のプロとして扱ってくれたのです。そこで、私もプロのようにふるまおうとしました。すぐにタイプライターに向かって次の物語を書き始めたのです。そして次々に物語を書いて、じゃんじゃん送りました。DCトムソン社は、そのほとんどを買ってくれました。

(11) そのうちに、スコットランドのダンディーにある出版社で働かないかというお誘いが来ました。生まれ育った町からは、はるかに遠い場所です。驚きましたが、これが大きなチャンスだということにはわかっていました。スコットランドには行ったこともないし知り合いもいないのに、私はすぐに承諾の返事を出しました。作家になるという夢をかなえるチャンスがめぐってきたのです。

(12) DC トムソン社に入った私は、雑誌記者として2年間働き、ティーンズ向けの雑誌に記事や物語をたくさん書きました。1964年にいよいよ創刊されることになった新雑誌には、最も若いスタッフ、つまり私の名前がつけられることになりました。そして新雑誌「ジャッキー」は、みんなから愛されるようになりました。英国で私が講演すると、聴衆の中のお母さんたちがクスクス笑ったりつつき合ったりしながら、若いときに「ジャッキー」を愛読していたとおっしゃいます。私は、DC トムソン社のほかの雑誌にも原稿を書いていた。「アナベル」という月刊誌では、お母さんと赤ちゃんのためのコラムを担当しましたが、まだ17歳だったので、なかなかたいへんでした。赤ちゃんを抱いたこともなければ、妊娠についての知識もわずかだったからです。それでも、いろいろな教本を見たり、大勢の若いお母さんたちとおしゃべりしたりして、なんとか記事を書いていました。その経験から私は、融通をきかせることや、新しいものに挑戦することや、定期的書き続けることを学びました。この3つはどれも、将来作家になるために、とくに児童文学の作家になるためには必要な技能でした。

(13) その後私は、レッド・レター（赤い手紙）という週刊誌の記者になりました。編集者は、雑誌の名前にちなんで、読者の手紙だけで構成するページを売りにしようと考えましたが、問題が1つありました。読者から手紙が来なかったのです。読者は、昼間はお店や工場でけんめいに働いている人たちです。そういう人たちは、夜になると、疲れた足を休めながら雑誌を読みたいとは思っても、何かを書こうとは思いません。そこで、最も若くて最も熱心な記者であった私のところに、毎週8通から10通もの読者の手紙をでっち上げるよう注文が来ました。これも、私にはいい勉強になりました。多様な関心をもった多様なキャラクターを作り出す訓練をさせてもらったのですから。私の腕を認めた編集者は、今度は別の仕事をよこしました。星占いのコラムを毎週書くという仕事です。といっても、私は占星術のことなど何も知りませんでした。星図（スターチャート）がどんなものかさえ、さっぱりわかりません。お恥ずかしい話ですが、私の星占いも、すべてでっち上げでした。私は12月17日生まれの射手座です。私が星占いの欄を担当しているあいだ、射手座の人たちはみんな、背が高く浅黒い美形の男性に出会ったり、職場で輝かしい成功をおさめたり、大金が転がり込んだりする運命になっていました。しかも週を追うごとに、私の予言はますます派手になっていきました。でも、不思議なことに、それから何年かたつうちに、その予言のほとんどは現実のものとなったのです！ 再びDC トムソン社で働くことになるのは私が予言し得なかったことの1つですが、DC トムソン社は現在、読書好きの女の子た

ち向けのコミック誌「オフィシャル・ジャクリン・ウィルソン・マガジン」という雑誌を発行しています。この雑誌には、短編物語や、上手に文章を書くためのコツや、いろいろなパズルや、自分で何かをつくるためのページなどがあり、毎月違う私の本が紹介されています。私がどんなところで暮らしているか知りたがる女の子たちのために、私の写真もたくさん載っています。ほとんどの号には、私が飼っている小さな灰色と白の猫が登場します。この猫ジェイコブは、今では私と同じくらいたくさんファンレターをもらうようになりました。

(14) ティーンエージャーの私にとって雑誌の原稿を書くのは楽しいことでしたが、私がほんとうにやりたいのは、子どものためのちゃんとした本を書くことでした。私は今でも、都会に住んで家庭にトラブルを抱えているような子どもたちに関心があります。私の最初の本は『リッキーの誕生日』という幼年童話で、主人公は、大きな公営団地に住んで、誕生日プレゼントをたくさんもらいたいと思っている、たくましい男の子でした。この子の望みはどんどん大きくなりますが、結局はペットのウサギをもらって大満足し、これこそ何よりも素晴らしいプレゼントだと思うのです。世界最高の傑作童話とはいえませんが、とにかく出版されて本になったので、私は児童文学作家として順調な一歩を踏み出したと思ったものです。

(15) ところが、そううまくはいきませんでした。その後 20 年以上の間にたくさん本を書きましたが、どれもパツとしなくて、たいした収入も得られなかったのです。いい書評は出ても、本はちっとも売れませんでした。たいていは、夢見がちで孤独な子どもが主人公だったので、読者が少なかったのかもしれない。作家としての突破口がようやく開けたのは、20 年前に出した『おとぎ話はだいきらい』です。これで風向きが変わりました。お話はシンプルで、主人公は養護施設にいて里子になりたいと願っているタフな女の子トレイシーです。トレイシーは、やんちゃで、生意気で、扱いにくいのですが、やさしい心を持っています。トレイシー自身がノートに書くように書いたこの物語には、文章にぴったりの白黒のイラストをたくさん入れたいと、私は思いました。そんなときニック・シャラットと出会い、それ以来すてきなコンビを組んでいます。『おとぎ話はだいきらい』は、英国では 100 万部以上売れ、人気のテレビ番組が 6 シリーズも制作され、各地で舞台公演が行われ、トレイシーの雑誌が出版され、関連グッズもたくさん売り出されました。この本は、たいへんうれしいことに日本でも翻訳出版されていま

す。偕成社からは、和田知子さんが編集して下さり、続編2冊と合わせて「トレイシー・ピーカー物語」セットも売り出されました。これには日本語版への私の前書きも載っています。

(16) 日本で早くに翻訳された作品の一つに『バイバイわたしのおうち』があります。訳者の小竹由美子さんが英語で読んで感動し、日本の子どもたちのために翻訳したいと思ってくださった物語です。主人公はアンディという女の子で、両親は離婚しています。そのせいで、アンディはいつもスーツケースに持ち物をつめて、1週間はママの新しい家族と、次の週はパパの新しい家族と過ごさなくてはなりません。アンディは、小さなおもちゃのウサギのラディッシュをかわいがっていて、どこへでも連れて歩きます。この作品は、世界中で共感を得ているようです。といっても、私は無意識にですが翻訳者に頭痛の種をあたえてしまいました。というのは、Aはアンディ、Bは Bathroom(お風呂場)、Cは Cottage というように A から Z までの英語のアルファベットに従って各章を書いたからです。各国の翻訳者たちはきっとご苦労なされたことでしょう。うれしいことに、日本でも2つの団体がこの作品を劇に仕立てて下さいました。私も見てみたかったと思います。ラディッシュは人形ではなく生身の人間が演じてくださったようですね。私にとってはラディッシュはまさに生身の人間のような存在です。イギリスの学校や図書館や本のフェスティバルで講演をするとき、私はウサギの人形ラディッシュを持って行って、子どもたちに向けてちょっとした芸当をやらせたりします。

(17) ティーンエイジャーに話をするときには、おもちゃを持って行って芸当を見せたりはしません。そんなことをすれば、嘲笑を受けてしまいますからね。私は時々ティーンエイジャー向けの作品が書きたくなります。日本では理論社が『キスはオトナの味』や『ラブ・レッスンズ』を翻訳出版して下さいています。どちらも初恋をテーマにしたものです。4冊の「ガールズ」シリーズも、日本でとても人気があるようで、ネットにファンクラブのサイトまで誕生しました。ティーンエイジャーの女の子の関心事は、世界中どこでも同じなのではないでしょうか。彼女たちは、自分の外見や、着るものや、親とのいさかいで、くよくよしたり、親友に秘密を打ち明けたり、ボーイフレンドのことで悩んだりしています。このシリーズの最初の巻『ガールズ・イン・ラブ』は、日本でも10万部くらい売れたと聞きました。日本でも多くの女の子たちが語り手のエリーに自分を重ね合わせてくださったでしょうし、女の子の世界をちょっとのぞいてみようと思った男の子もいるかもしれません。

(18) 私がティーンエージャーだった頃は、その年齢の読者向けに書かれた本がありませんでした。その頃の子どもの本の世界は、今よりもっと静かで和気あいあいとしていました。英国は、どの時代にも質の高い児童文学を生み出してきたことで知られています。『不思議の国のアリス』もあれば、『くまのプーさん』もあれば、『ピーターラビットのおはなし』もあるのです——日本ではビアトリクス・ポターが特に有名なようですね。とはいえ、かつては子どもの本が大きなスポットライトをあびることはあまりありませんでした。それを変えたのがJ.K.ローリングです。世界規模でのハリー・ポッターの成功を目にすると、どの出版社も2匹目、3匹目のドジョウをねらって血眼になりました。

(19) 子どもの本の出版界には、流行があります。ハリーとhogwartsが、一時は魔法のように世界を席捲していました。今は、ステファニー・メイヤーのバンパイヤやオオカミ人間が、ベストセラーチャートを支配しています。児童書の最前線を占めているのはファンタジーですが、私のようなリアルな物語を書く作家にもまだスペースは残されています。

(20) 私の本が一つのブランドになり、ニック・シャロットの表紙がついて英国の多くの書棚に並んでいるというのは、とても不思議なことです。私の本に人気があるのはなぜか、というのは、よくきかれる質問です。私は、子どもの視点から一人称で書いているのが、その理由ではないかと考えています。私の本はしばしば複雑で深刻な問題を扱ってはいますが、できるだけとつきやすく、生き生きとした作品に仕上げようと私は努力しています。ちょっとしたおもしろい部分をはさんで、緊張を和らげるようにしたいとは思っていますが、だからといってとても悲しい部分を省くつもりはありません。時々私は不安になりながら、読者の子どもたちに「この本があなたたちを泣かせちゃったかしら？」とたずねることがあります。子どもたちはいつも「うん、わあわあ泣いちゃった。でも泣くのは好きなんだ」と答えてくれます。

(26) 私はまた、自分の作品を紹介・宣伝してまわっています。日本の児童文学作家たちも、学校に出かけて子どもたちと話したりしているのでしょうか？ 読者ときちんとふれ合い、どこがアピールしどこがアピールしなかったかを直接知るためには、学校訪問はすばらしい方法です。たくさんの学校を訪

問するのは、とても疲れます。特に、夜明けと共に起きて遠くまで行くような場合はなおさらです。時には、4回連続で話をさせられることもあります。4回目には頭がくらくらしてきて、この話はもうしたのかどうかさえ、わからなくなってしまう。でも、子どもたちが私の冗談に笑ったり、背筋を伸ばし目をかがやかせて私の話に聞き入ったりするのを見ると、ほんとうによかったな、と思います。今は心臓に問題がありすぐに疲れてしまうので、たくさんの学校を訪問するのは無理になりました。しかし、25年以上にわたって学校訪問をしてきた私は熟練の域に達していて、以前は毎週2つか3つの学校を訪問していたものです。荒れている中学校を訪問する時は勇気がいりました。日本では違いかもかもしれませんが、イギリスの14歳の中には手に負えない生徒もいて、甘い顔をしていると情け容赦なくからかったりします。そんな手に負えないティーンエイジャーに話をするときは、油断せずに気を張ってなくてはなりません。でも、その中のほんの数人でも本を読んでみようという気になってくれるならば、話をする甲斐があるのです。

(22) 幼児や低学年の子どもたちに話すのも、そう簡単ではありません。私が自分の本について話をしたあと、「何か質問がありますか？」ときくと、5歳の子が手を上げて「今日はパパの誕生日なの」なんて、全然関係のないことを言ったりするからです。私が好きなのは、7歳から11歳くらいの子どもたちに話すことです。その年齢だと40分間じっとすわっていることもできるし、すばらしい質問もしてくれれます。それに、まだ素直なので、みんな一緒に楽しい一時を過ごせるのです。

(23) 私が訪問した学校の数は、もうとっくにわからなくなっていました。でも、どこに行ってもほとんど必ず「ジャクリーン・ウィルソンさんですか？ 子どもの頃、学校でお話をうかがいました」と言う大人があらわれます。

(24) 子どもたちは、作家や本が気に入ったら、口コミで伝えてくれます。いところにも、同じ通りの友達にも、ダンス教室やサッカーチームの仲間にも、話してくれます。するとありがたいことに、聞いた子どもたちも私の本を買ったり、図書館から借りたりしてくれるのです。私は子どもの頃、公共図書館に入り浸って、次から次へと本を読みふけていました。ですから子どもたちが私の本を借りてくれるのは、私にとって大きな意味があることです。「この10年間にイギリスの公共図書館でいちばん本を

借りられた作家」になったとき、私はとても誇らしい気持ちになりました。

(25) 日本では書店が繁盛しているようで、それは素晴らしいことだと思います。イギリスの書店は、苦戦しています。去年は、イギリスの大きな書店チェーンであるボーズが店を閉めましたし、多くの個人経営の書店がつぶれてしまいました。原因の一つは、ネットで本を買う人が増えたことです。また一方には、大きなスーパーがベストセラー本を大幅に値引きして売っている現状があります。今のところ私自身は被害を受けていないものの、素晴らしい文章を書く洗練された作家たちの本が書店に並ばないことに私は危機感を抱いています。もちろん今は、電子書籍も競争相手の一つですが、私自身は、テクノロジーの集積を本とは呼べないのではないかと考えています。特に子どもの本は、鮮やかで魅力的な表紙がついたリアルで恒久的なものであるべきでしょう。サイズや形もさまざまであるべきです。じっくりとカラーの絵を眺めることができる大判の絵本もあるし、幼い指でめくるのにふさわしい良質の小型絵本もある、というのがいいのです。物語の本ならば、ちゃんと書棚においてあって、見返しには誇らしげに名前が記入してあり、気に入った箇所はページが折ってあり、挿絵にはていねいに色が塗ってあったりするのいいのです。子どもの本は、大切にされ、次の世代へ、そしてまた次の世代へと手渡されていくべきものです。みなさんも、そう思ってくださいよう願っています。

( 翻訳 : さくまゆみこ氏 )